上代衣服考＝豊田長敦
雨窓閑話＝著者未詳
屋気野随筆＝小野高潔
寸錦雑綴＝森島中良
泊洒筆話＝清水浜臣
弁正衣服考＝著者未詳
心の双紙＝松平定信

7

日本随筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成　第一期　第四巻
昭和二年七月廿八日発行
編纂者　日本随筆大成編輯部
代表　早川純三郎
発行者　吉川半七
発行所　日本随筆大成刊行会

日本随筆大成
〈第一期〉7
昭和五十年七月五日　印刷
昭和五十年七月二十日　発行
編　者　日本随筆大成編輯部
発行者　吉川圭三
発行所　株式会社　吉川弘文館
〒113　東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三―九一五一〈代表〉
振替口座東京二四四番
製　作　株式会社　たんちょう社

解　題

本集には、上代衣服考、雨窻閑話、屋気野随筆、寸錦雑綴、泊洒筆話、弁正衣服考、心の双紙の七種を収める。

上代衣服考　一巻

豊田長敦　著

本書は、神服翁と呼ばれた著者が永年の苦心と情熱によって、上代人の衣服及び其れに関係のあるものをまとめて考証意見を加えたものである。幕末から維新の新政府へと政権の移る過程に於いては、当時の国学者の神武復古の情熱は現代の私共が考え得るよりも遙かに強かったかと思われる。当時の国学者の中には左衽に衣服をした人もあったと伝えられている。本書は袖袂、釧、襷、其の他衣服関係の上代人の生活状態などを考証し、自説を加えて、本書がまとめられたのであった。著者の本書成立の喜びは、最後に附した長歌、短歌、旋頭歌によっても察せられる。本書には、鈴木真年、黒川真頼、蜂屋昌史、伊能穎則等名家の序が加えられており、記事中にもこれらの人々の意見が時々見られる。明治三年十月刊行された。

豊田長敦　姓は平、家号を檍舎、神服翁と称した。明治初年頃神祇官史生に出仕し、明治九年一月歿した。享年七十四と云うだけで、其の人物に就いて本書以外に知る所がない。

雨窻閑話　三巻

著者不詳

本書は、古今近世の事蹟雑話を集め、記事の後に著者の意見も加えてあり、多く武士道上の教訓談

を主としている。織田信長、豊臣秀吉、上杉謙信、細川藤孝等の逸事を初め、古代質素の事、観世一代能の事など、文章もすらすらとしていて、通読にも興味がある。依って相応に流布したものと思われる事は、本書は「明君白川夜話 二巻 松平定信著」として写本で伝えられ、これには吉見競良殼述とした天明二年二月の序が附してある。此の外に「白河関礎録」、「夜譚随筆」等とも称せられたものが内閣文庫に現蔵されている。「雨窻閑話」として発刊されたのは嘉永四年十月で、この刊本には、河田迪斎（佐藤一斎女婿）の序が附されており、ここに「此書何人の所著なるかを知らず」と明言している。而して此の序を依頼した小林畏堂（松代の人、『畏堂詠史百絶』の撰あり）は本書出版に当って、本書が楽翁侯の著なるや否やを、其の侍臣田内月堂に質したところ、月堂は「公素此作無し。世の伝ふる所は非也」と云う答を得た事を、其の跋文中に述べている。然し本書は内容見るべきものありとして、雨窻閑話と題したとも陳べている。かくして刊本として流布するに至ったのである。本書再刊に当っては、刊本を原として、内閣文庫蔵版本及び「明君白川夜話」写本等をも参照比較した。活字本としては『百家説林』、旧刊大成一期四、『日本随筆全集』一九に収められている。

屋気野随筆　一巻

小野高潔　著

著者は文化十四年二月二日火災によって家財蔵書等を一切焼失して、身は栗隈の里なる娘の家にやっと落着いた。知友など様々の品を贈られた中に筆硯紙などがあったので、心に浮ぶこと何くれと書きつけたのが本書であり、只の一書も身辺に置かずして、前後の次第もなく、心に思い出づるままを草したのが本書であり、題名も「やけ野随筆」というべきかと序及び跋に自ら記している。著者はなお附言を加えて、友人が本書を見て「焼野土筆」とせばおもしろからんと云ったので、しからばそれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

もよしと焼野土筆と名を改めたとも云っている。よって本書はこの二つの名前で世に伝えられている。高潔は父高尚の学統を継いで、歌人としては『霞関集』の中に名を連ね、堂上家系に属する。必ずしも真淵一派の古学と意見研究が一致するわけにはいかない。本書中に一例を挙げれば、「仮字用法は大切の事也。これに二法あり。然るに今の古学者は、古仮名のみ取用ひて今仮名を誤としてすて、当時の歌は今仮字のみ知つて古仮字をしらず。いづれも未達の事也云々」と云う条などもある。世には本書について、「本朝の文物制度を研究する著書多けれど、惜い哉、杜撰の誹を免かれず」と云う説もあって、一蹴せられている傾向もありはしまいか。本書の一読を奇縁として、小野家高尚高潔の学事の研究が為され、真淵系以外の当時の学者の研究にまで及んだら、江戸国学の研究も更に賑かになろうかと考えられる。

小野高潔　高尚の子、幾之助、斎宮といい、通称忠左衛門、号は東山、竹風亭主人、敷浪翁等と称した。明和六年七月朔日はじめて浚明院殿に拝謁し、天明四年十二月父跡を継ぎ小普請方を勤めた。父高尚と共に国学者として知られ、著述も多く伝えられている。又歌人としては『霞関集』に其の名を見る事が出来る。

静嘉堂文庫松井簡治博士旧蔵本に『神楽歌略註』二巻と云う写本がある。この本が高潔の自筆稿本で「蟫夫」「平高潔章」の蔵書印記がある。この本に「文政三年十一月発筆至同廿九日　七十四翁平高潔」とあるから、この時までの存命は確かめられる。菩提寺は牛込松雲寺であるが、今は中野区昭和通二ノ二十に移転されている。『東京掃苔録』を見ると、この寺は臨済宗妙心寺派に属する寺で、ここに小野家代々の人々が合葬されている。文政三年十月九日歿、年八十二、精岳知進居士と云うのが高潔の法名と記してある。この歿年は改めらるべきであろうか。この年までは存生されたようであ

る。高潔の略伝と著書などは『国学者伝記集成続編』に集められているが、静嘉堂蔵の自筆本や写本が少々あるのをここに挙げて補っておきたい。前記の『神楽歌略註』の外に、『歳事記三潮草』（十二冊、写本〔蜂屋正盛〕）『神事考証』（二巻、写本）『日本逸史考異補遺』（自筆、寛政四年）『日本書紀集説』（七巻、自筆）『焼野土筆』（文政元年、源正盛写）『帝皇系図』（写本、文政五年、小野高潔）『百人一首仮庵抄』（敷浪の自序あり〔文化九年菊月末〕、写本、源正盛、文化十四年九月）、其の他高潔の著書は、無窮会文庫、其の他にも蔵せられている。本書再刊に当り都立中央図書館加賀文庫蔵本及び静嘉堂文庫本を以って比校した。

寸錦雑綴　一巻

森島中良　編

本書には、序文東都狂生森羅亭主人の下に卍に象の形を合した印があるので、この序文の主は即ち森島中良であることがわかる。本書は初め「指子（さしこ）」と題したところ本屋が難色を示したので、「寸錦雑綴」と命したとある。内容は著者自らの云うように、「面白くもへんてつもなし　風雅でもなく　洒落でなく　手鑑でなく　画譜でなく」と云っているように、所謂随筆と見るより、風俗史資料と云うのが適当かと思われる。見てなかなか面白いものがある。本文中に平賀源内の歯磨嗽石香の報条を載せて、平賀先生作云々と説明を加えているのを見ても、この森羅亭卍象は二代目の森島中良である事が確かめられよう。本書は美濃判の刊本であるが、刊年を欠いているので確かな出版年は不明であるが、本文中に力士谷風の手判の説明に同力士が寛政七年に歿した事が見えるから、同年以後、文化初年頃の刊行ではあるまいかと云われている。勧進能番組から翁瓢米櫃に至る二十九項が録されている。

森島中良については、第二期八巻「反古籠」の解題の末に略伝を附したから、同書を見られたい。

再刊に当り、都立中央図書館加賀文庫蔵本により、一部印刷を改めた。

泊　洎　筆　話　一巻

清水浜臣　著

浜臣の著述は多く写本で伝えられているが、稿成るに従って門人知友の求めによって貸与して世に流布したものが多い。本書も其の例の一つと考えられる。浜臣の著作の刊行されたものは多く万笈堂によって出版せられた。其の刊本の一つに、文化七年三月に刊行せられた『杉田日記』がある。この書後に蔵板目録があって、そこに「泊洎筆話第一稿　清水浜臣大人著　全二冊」とあって次のような広告文が記載せられているのを見た。

此筆話は、近世の歌人のうへにおきて、おもしろきはなしをあつめ、又近来の世にしられぬ歌人の小伝めきたることもおほく、又まゝ哥よむ心得となることすくなからず、一たび此書を手にとりたる人、巻のをはるまで、目をはなつことあたふまじきほど、おもしろき筆話なり。

この文章は勿論本屋の売らんための喧伝の味もあるが、浜臣の随筆として本書が一番世に迎えられ、多く読まれたものかと思われる。著者の知友や多く古学者の逸事を伝え歌人にわたり、興味深いものがある。然し此の広告の記事、すぐさま信用しかねる所もある。「第一稿　全二冊」とある事である。而して実際には写本では所々に伝えられ、東京大学図書館には二部蔵されている。然し何れも刊本ではない。東大蔵の南葵文庫本は狂歌堂真顔其の他の諸家の旧蔵本であり、これには文化十三年十月の宮世としまさと云う人の序文もあり一寸珍らしいものと思うが、前記広告文とも必ずしも一致しない。本書の真に世に流布したのは『百家説林』巻二に収められてからであろうか。この本の巻末には文化五年夏五月稿とあってこの時分に一応脱稿したことかと思われる。然し本書中には、文化十年

刊行の『しげ子歌集』の事も見えるから、此時分まで書き継がれていたであろうと思われる。本書に古学頭揚の記事の多い事から考えると、或は縣居の反故の整理による所産ではないかと推測される。

本書旧刊本の再刊に当って、国会図書館蔵「桜園叢書」38、東大図書館蔵南葵文庫本、（この本は狂歌堂真顔、東条琴台、小中村清規等名家の旧蔵本である。）其の他一本等によって校合を加えた。

清水浜臣の略伝は第二期十七巻の「遊京漫録」の解題に附したから、ここには省略する。

弁正衣服考　一巻

著者不詳

本書は豊田長敦の「上代衣服考」の所説を抜抄してこれに弁駁を加えたもので、甚だ手厳しい論難である。論者は矢張国学者と見えて、明確に其の非とする所以を論じて止まない。一例を挙げると、「満州は今の如く甚く長く成たるものならむと思ひしに、後よく考れば、千万の国その開闢の時は、自ら我皇神達の御衣服より出て、皆同じかりしにや有けむかし」というあたりにこの弁者は業を煮やし、「かかる説は平田氏のとらざる所なるを、作者いかなる痴人にかあらむ云々」と云って、上代の衣服は西洋衣服という説を作り出せる事に触発して、この論難に及んだ事らしい。当時既に一方には西洋崇拝の新人も出て来た事であろう。故にこの書の作者は豊田氏を怨むことにあらず、世の洋風論者に口を藉さしむるを恐れて、この一書を成したと云うのである。其の作者の氏名の未詳なるは惜むべき事である。

本書の原本は無窮会神習文庫の蔵本である。明治五年七月三日に稿を成したとあるから、豊田氏の著出版後稍日を経ての起草であろう。

心の双紙　一巻

松平定信　著

本書は、享和三年著者病臥の節柄、家臣竹沢養渓一種の諷刺画を描かしめ、定信公筆を執って人心に表裏ある事を示し、人君為政者等にも警告を与え、誠実を尚び虚飾を斥け、知行合一の旨を示された意があろう。もとより病中の戯作であるが、以って公の人柄をも感知する事も出来ようか。画工竹沢氏は名は惟房、狩野派の画家、江戸の人、文化五年正月二十一日に歿したという。国立国会図書館には水月庵こと堀田正敦侯の識語のある写本があって、正敦侯は定信公に示されてこれを書写したが、画は及ばぬので昌芳と云う画家にかかしたと云っている。堀田正敦は楽翁公の『花月日記』三十四冊（文化九年致仕の日より文政十一年除夜迄の日記、自筆本天理図書館現蔵）にも序文を添えている。両侯の近親の状態も察せられる事である。但し国会図書館の写本は、正敦侯の自筆ではなく、有賀長隣（ながちか）（明治三十九年十月一日歿、年八十九）の筆写する所である。絵は竹宮公雲とあるが其の人を詳かにしない。本書も亦他にも写本が伝えられているが、『百家説林』と本大成旧刊本に依って活字本として流布した。

松平定信は、田安宗武の第七子、宝暦八年十二月二十七日に生れた。十六歳にして、

心あてに見し夕顔の花ちりてたづねぞわぶるたそがれの宿

の詠歌があり、これは当時京都の公卿の間にも喧伝せられたと云う事である。此の時代には、漢文漢詩其の他絵画猿楽まで一応稽古せられたと伝えられるが、和学以外は後年これを顧られなかったと云う。十四歳の時父宗武薨ぜられ、安永三年十七歳にして、奥州白河城主松平越中守定邦の養子となった。而して家督を相続されたのは天明三年であった。この七月には有名な浅間山の大噴火があり、白

河藩もこの災害を免れる筈がなく、住民手を拱て餓死を待つという風であった。この大災害にあって、定信公は家老を呼んで、厳重な倹約令を下して、一方日夜救済の策を講じたため、白河藩は他藩とちがい餓死者を出さなかったという。かくて天明七年六月十九日、幕府首席老中に任ぜらるるや、田沼時代の放漫政策を改め、勤倹貯蓄の政策を断行し、所謂寛政の治を達成し、其の政策の一つ「七分金積立の法」は、江戸市民の為に町費の不用なるものを除くなどして積立金を行い、不時の出費や民政の為に之を費やし、世の安定を計られた。其の余剰百四十三万両は維新の際、明治政府に引きつがれ、東京市は、これによって養育院、橋梁、街燈、共同墓地、ガス会社の建設に宛てられたという。楽翁公の恩沢現在に至っては、東京都民にも及んでいると云う事になる。然し定信の緊縮政策は幕府大奥の最も喜ばぬ所であり、又光格天皇が実父典仁親王に太上天皇の尊号を奉らんとの旨に反し、幕府の意見によりこれを拒み奉った事などもあり、辞意を表し、寛政五年七月二十三日を以って将軍補佐並に老中職を免ぜられた。然し寛政の異学禁を行い、林家を補けて、諸学を朱子学に次ぐものとして学制を補強せられたり、『集古十種』の編纂其の他学事文化面の功績は枚挙に遑がない。かくして要職を退いてからは悠々自適の生活を楽まれ、文政十二年五月十三日、七十二歳で卒去せられた。

楽翁公について、手近で一番確かな資料は堀田正敦等編『寛政重修諸家譜』五十五であろう。一代の政治家であり人物も良いので其の研究書は実に多い。今簡単に其の大様を知り得るものとして、三上参次著『楽翁公と徳川時代』、楽翁公遺徳顕彰会編『楽翁公余影』などがある。同時代の人の書いたものとして、覚斎道人著『薪烟見聞日札』と云う写本がある。これには楽翁公と松平冠山侯とを対比して書かれていたと思う。

楽翁公の小伝は、第二期第四巻「閑なるあまり」の解題に附したものをも参照せられたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

上代衣服考……一
雨窓閑話……五七
屋気野随筆……一二三
寸錦雑綴……一三七
泊酒筆話……二二三
弁正衣服考……二五三
心の双紙……二八一

（解題　丸山季夫）

官許

上代衣服考

全

一名神服考

豐田藏板

天地のはじめ天比理乃咩命神衣おらしまし天日鷲命荒妙和妙つくらしゝより神麻続部倭文部長幡部忌供奉りて子孫の八十つゞきたえざる神業になもありける。さるをみつぐりの中つ世にことさへぐからくにより呉工織衣てふ女をたてまたしてより新しきにうつるならひにやいまさら神衣はいかにつくりたまひけん考べくもあらぬを、わが友豊田の老は千磐破神随のまなびにいたづき八意おもひおこしつゝ石上ふるきあとたづねて上代衣服考てふ書を著し僕が文室にもたらしおこせたれば、ひとわたり閲に八尺瓊の五百津御統るの玉のごと真清のかゞみあきらかに悟されたりと愛のあまりに巻のはしにかくはしるしぬ。

明治二年六月　　弾正大疏穂積臣真年

まつぶさにつたへなきことをらまつぶさにかむがへしらむは、いともかたくいともなしえがてなるわざになもあるを、つるぎたちとよだのをぢたまちはふ神みそのおきなはもむらぎものこゝろをつくさえあらたまの年月にいそしまえて、あやしかもくすしかも神代のみけしはかくぞありけむ、神のみけしはかくこそありけめとうたによりふみによりそこにもとめ、こゝにあかさえつあはれつたへはしあらねども、あはれつたへはしなけれども、かむがへえらえたるかも、あなぐりえらえたるかもまこといそしのをぢやまこと神みそのおきなや。

明治二年十二月

大学中助教　黒川真頼

豊田翁の若有し時より皇国の学問に心入られけるをおのが父昌備源久愛よろこびて、家の宝と秘置し縣居大人が富士の高根は雷の音する雲の上といふ読歌かゝれしを贈りけるとぞ、そはおのれいまだ世に生れぬ昔にて、父もはやなき人と成ぬるにこたび翁の此ふみを携て已に談けらく、負気なくもかく物せしを思に、先つ年の事は正しくこの験にて専ら大人の尊霊にもかなひたるならむ、その由緒一言かきてよと乞せめられけるに辞がたくて聊ことあげするになも、抑この翁は常に万をおきて清き事をのみ好まれける、余に掛巻も恐き神呂岐乃尊の檍原の故事に依て書斎の名を檍舎と号け、そのはぎをも庭に植生せてあるは枝もてをかしき調度など作り人にも与へ自身も楽まれ、朝夕に大直毘乃神のみ霊のふゆをこひ祈れて今この書の考へ成たるは甚も甚も奇しき功になもありける、然ば此翁の名も今より後富士の高根の如鳴神の如弥高くあふがれゆかむ、いや遠く響わたらむ、あはれあはれ愛たきかも貴きかも、明治の二年といふ年の冬かくしるすは静岡藩士族蜂屋昌史

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.